気象現象とメタファーの一考察
—精神における「晴れる」を中心に—

松浦　光

キーワード　*「晴れる」　気象現象　概念メタファー　認知言語学　精神*

1．はじめに

Lakoff and Johnson(1980)は我々の認識が単に物事を言語的に理解しているのではなくある概念領域を他の概念領域へと写像(mapping)することで捉える認知プロセスの存在を指摘した。これが本稿で扱うメタファー(metaphor)である。身体的経験豊かな具体的な起点領域(Source domain)から身体的経験があまりない抽象的な目標領域(Target domain)への概念領域間の体系的な写像関係は概念メタファーと呼ばれ、そこから一貫性を持った様々なメタファー表現[1]が生み出されていると考えられる。

だが、体系的であるはずの概念メタファーの適用について生産性や容認度にはギャップがあり、まだ明らかになっていない点も多い。これは「まだら問題」とも呼ばれる。これらの現象に対してLakoff(1993)では、メタファーでは起点領域のイメージ・スキーマ的構造は保持されるが、目標領域に固有の構造に矛盾する場合は写像されない、とする「不変性原理(Invariance Hypothesis)」が挙げられている。また、松本(2007)では、メタファー表現の実現を妨げるものとして2点挙げている。1点目は起点領域、目標領域に対応関係が結び付かない「概念対応関係の欠如」である。2点目は概念間の対応関係においてメタファー的意味を実現できるのはより過剰指定（概念対応関係に不必要な要素を持っていること）が少ない適切な語がなく、かつ、同じ意味を表すものとして他の語が定着していない場合のみ、とする「語義的経済性の制約」である。しかし、概念間への対応関係において具体的にどのようなものがメタファー的意味の実現の妨げてとなり得るのか疑問が残る。

そこで、実際のメタファー表現を実例に基づいて考察していく必要がある。特に気象現象に関するメタファー表現はいくつかの先行研究は散見できるが、具体的な表現までの分析には及んでいない。本稿は気象現象である天気に関する表現の中で「晴れる」から気象現象と精神の概念間の対応関係を考えていく。

そして、気象現象が起点領域となると、精神には感情・思考の2つの領域が存在し、目標領域になることを主張する。

本来、「晴れる」は天気を表す語であるが、「心が晴れる」、「不安が晴れる」、「疑念が晴れる」など天気以外の精神に関する表現が「晴れる」と表現される。精神とは「人間の心。心のはたらき。」(『大辞林』 第三版）[2]とあるように心の動きである。精神というものは抽象的な概念であるため目標領域になりやすい。

しかし、「晴れる」と精神現象がメタファー表現として結び付くことには偏りがあり、全ての精神現象が「晴れる」で表されるわけではない。そこには「晴れる」自身の持つ性質が関係すると考えられる。我々はどのように「晴れる」と捉え、人間の営みである精神を理解するのか、メタファーの観点から明らかにするのが本稿の目的である。

２．先行研究の検討

2. 1. 「晴れる」の意味記述について

まず、「晴れる」の辞書等での記述を取り上げる。『大辞林』第三版(2006:2083)では以下のように記されている。

「晴れる」
①雲や霧が消える。「空が真っ青に―・れる」「この霧はお昼頃には―・れるだろう」
②雨・雪が降りやむ。あがる。「四時頃から雨は―・れた。/田舎教師 花袋」
③いやな気分がなくなってすっきりする。はればれする。「気分が―・れない」
④犯罪の容疑や疑いなどがなくなる。「疑いが―・れた」
⑤展望が開ける。「谷しげけれど、西―・れたり/方丈記」

森田(1984)では、「晴れる」を<自然現象の場合>(1)「その場面に懸かり塞いでいた霧などが消え散ずる」、(2)「雨、雪などが降っておらず、雲が切れて光の差す明るい状態となる」、<精神現象の場合>(1)「心に掛っていた曇りや気掛かりな点が取れて、さっぱりと明るい気分になる」、(2)「他者に対して引け目や遠慮などを感ずる状態が解消する」と記述している。

以上のように「晴れる」が自然現象と精神現象を表すことは、先行研究にも記述されている。だが、これらの記述はなぜ自然現象と精神現象が結び付き、

「晴れる」が好ましい精神状態や、他者からの嫌疑がなくなる状態を表せるのかについて、その動機づけは、明らかになっていない。

2. 2. 気象現象と概念メタファー

次に、気象現象に関する概念メタファーの研究を取り上げる。Grady(1997)では気象現象に関するメタファーとして<< CIRCUMSTANCE ARE WEATHER >>について言及し、その基盤に天候の状態と我々の感情の状態や状況との相関関係を挙げている。また、Shinohara and Matsunaka(2003),(2009)では日本語におけるメタファーとして<<EMOTION IS EXTERNAL METEOROLOGICAL / NATURAL PHENOMENON THAT SURROUNDS THE SELF>>を挙げ、基盤として低気圧や太陽光の不足によって気分が落ち込むなど天気の変化は人間の心身に影響を与えることが指摘されている。だが、これらの研究は具体的な表現までの研究に及んでおらず、メタファー表現の意味拡張のプロセスについては研究の余地がある。もし、本当に気象現象が人間の心身に影響を与え、メタファー的意味の基盤となるのであるなら「雪」や「虹」や「台風」など他の気象現象でも、精神現象を表すこともできるはずである。しかし、そこにはメタファー的意味の実現に制約が存在する。

日本語の気象現象に関するメタファー表現について、籾山(2006)では「心が晴れない」、「気が晴れる」、「顔が晴れない」などの表現に言及し、<<よい心の状態（になること）を晴れ（ること）を通して見る>>という捉え方を示した。これらを基に籾山は、人間はどのような天気が人間（の活動）にとって、好ましいか、好ましくないか経験的に理解し、「天気」に関する表現を用いることによって、「人間の心の状態（の変化）」を明示的に表現していることを指摘した。

有薗(2007)は、感情と身体部位という観点から「胸が晴れる」を取り上げ、胸に感じていた閉塞感が解消することを基盤として＜不安の解消＞を表していることに言及した。さらに、有薗(2008)では、＜感情表出＞フレームに基づくメトニミー[3]によって、内的心情を外部へ表出する道具を表す「顔」で、感情表出という機能の結果生じる生産物（＜表情＞）を表すと指摘した。そこから、種々の感情が無意識に＜表情＞として表れてしまう用例として、「{浮かぬ／怪訝な} 顔をする／顔が曇る／顔が変わる」を挙げ、それぞれ「表情」への言い換えも可能としている。

しかし、人間の全ての感情が「晴れる」で表現できるわけではない。好ましくない感情であるはずの「＊怒りが晴れる」、「＊恐怖が晴れる」、「＊恥ずかしさが晴れる」では明らかに容認度が落ちる。このメタファー的意味の実現の制約については何が影響するのだろうか。

2. 3. 気象現象とメタファー的意味の実現

ここでは、気象現象におけるメタファー的意味の実現に影響を与えるものについて考察していく。最初に、Kövecses(2010:21-22)の以下の記述に注目する。

> Light and darkness are also basic human experiences. The properties of light and darkness often appear as weather conditions when we speak and think metaphorically.
> （概訳[4]：光と闇は基本的な人間の経験である。光と闇の特性は我々が比喩的に話し、思考する際に天気の状態として現われることが多い。）

これは気象現象のメタファー表現について光の量が関係していることを示している。Kövecses(2000),(2010)においても光に関するメタファーとして<<HAPPINESS IS LIGHT>>を挙げている。つまり、光は好ましい精神状態に結び付くのである。むろん、英語での分析であり、日本語の気象現象に当てはまるのかは実例を通した分析を必要とする。また、日本語における光とメタファーの関係については、瀬戸(1995)において「分かる」ための条件として、(1)明るいこと、(2)区別がつくこと、(3)目立つこと、(4)見通せること、(5)覆われていないこと、(6)手に取れること、(7)一定の形をなしていること、の7項目を挙げている。そして、この7項目の条件の前提は「明るいこと」であり、それは「光」によって引き寄せられると述べている。「光」があることが「分かる」ことに結び付くのであるのなら、「光」が差さなければ何一つ「分かる」ことはできない。視覚に関するメタファーに関してGrady(1997)でも<< KNOWING / UNDERSTANDING IS SEEING >>が挙げられ、視覚的知覚と情報への意識的認識の相関関係が基盤であると述べられている。このように、視覚の優位性が存在し、「光」は人間の判断に結び付くことが指摘されている。

しかし、これらは「光」と「明るさ」の関係までしか言及がされておらず、実際の気象現象に当てはめてみる価値がある。具体的な気象現象については、Deignan (1997)ではsunny・cloudについて以下のように指摘している。

> When it is sunny, the sun is shining. Most people think that sunny weather is pleasant, and it often makes people feel happier. Sunny is used as a metaphor to describe people and situations that are cheerful and pleasant.
> Someone who has a sunny personality is cheerful and friendly, and makes the people around them feel happy. If someone is in a sunny mood, they feel

optimistic and happy. You can also say that the outlook or the future is sunny if you feel positive and optimistic about it. (同上:144)
（概訳：晴れるとき、太陽は輝いている。多くの人々が晴れることは心地よく、人々をより幸福な気分にすると考えている。晴れることは比喩的に元気で、心地よい人々や状況を表す。陽気な性格の持ち主は元気で友好的で周りの人々を幸福にする。もし、陽気であれば、その人は楽観的で幸福に感じる。展望や未来をポジティブで、楽観的に感じていると、それを晴れていることで表すことができるのだ。）

A cloud is a mass of water vapour that floats in the sky. Clouds are usually grey or white, and they often bring rain or dull, cold weather. Cloud is used metaphorically in several expressions to refer to an unpleasant event which spoils a situation. It is also used to talk about things which conceal a situation or make it difficult to understand. Other words associated with weather used in this way are haze, fog, and mist. (同上:146-147)
（概訳：雲は大気中に浮かぶ水蒸気の固まりである。雲は灰色や白い色をして、しばしば雨やどんよりした、冷たい天気をもたらす。状況を台無しにするような好ましくない出来事について言及する表現に雲は比喩的に使われる。また、状況を隠してしまうことや状況をわかりにくくするようなことを話すのにも用いられる。他の天気に関連する言葉でこのように用いられるものとして、haze、fog、mistなどがある。）

この記述によれば、「晴れる」は「太陽が出て、光が当たる好ましい状態である」、「雲」は「大気中の水蒸気が変化することで、好ましくない状態をもたらすものである」に集約することができる。「雲」がなくなることが「晴れる」ことであるのなら、「雲」は太陽の光を遮る遮蔽物としての性質を持つと考えられる。

空間と状態の関係についてLakoff(1993),Lakoff and Johnson(1999)では<<STATES ARE LOCATIONS(bounded regions in space)(状態は位置である(空間の中の区切られた領域の内部である)>>を挙げている。我々はある空間の内部にいる限り、そこで生じる経験が起こり続ける。つまり、光が少ない空間や視覚が遮られている空間にいる場合、その経験は持続性を持つことになると指摘できる。

一方、入学(2002)では遮蔽物については、日中を<遮蔽物が存在しない>状態であるとし、太陽光からの派生概念「透明」、「無」、「白色」を挙げ、その対極

にある闇を<遮蔽物が存在する>状態であるとし、派生概念「不透明」、「有」、「有色」を挙げている。だが、この遮蔽物について<<A PRODUCER OF NIGHT IS A COVER.（夜を作り出すものは遮蔽物である）>>という記述が入学でもあるように遮蔽物は光を遮る性質を持ち、視界にも影響を与える。このことが言語表現にもどのように影響を与えているのか検証が必要である。

３．仮説と考察

本稿では、概念間の写像には起点領域に対応するもの自体の性質を保持した制約が存在し、目標領域におけるメタファー的意味の実現に影響を与えているということを主張する。つまり、起点領域を気象現象、目標領域を精神における感情・思考とする場合、起点領域の「晴れる」には気象現象を基盤とした光・視覚・空間についての経験が存在し、前提として遮蔽物が存在する。目標領域ではこの性質に合致しないものは不必要な要素となり、メタファー的意味の実現を阻害する。まず、前章から「晴れる」の性質をまとめる。

晴れる：　遮蔽物（雲・霧）の量が少ない状態である。
　　光の量が多い状態である。
　　雨が止んだ状態である。
　　雲・霧が消えて太陽の光が出る。

基本的には、光が多ければ好ましい状態であり、遮蔽物である大気中の雲・霧によって光が遮られれば好ましくない状態になる。また、霧が出ると視界が遮られ、視界が悪くなることがあることを、雲が出ると雨が降り、さらに好ましくない状態になる可能性があることを、我々は背景知識として持っている。雨は黒い雨雲が光を遮り、黒く好ましくない状態、晴れは雲がなく光が差し、白く好ましい状態、そして、曇りはその中間に位置し、灰色でどちらでもない状態に概念化される。その点で、メタファー的意味の実現においては光を遮る雲・霧が重要な役割を果たしている。

気象現象としての雲・霧は、水蒸気が発生する場所は異なるが、いずれも光を遮り、いずれは消えるという共通の性質を持つ。そして、雲・霧が消えると光が差し込む。

我々は光を遮る遮蔽物が存在しない状態を「晴れる」と認識している。「晴れる」ことは前提として遮蔽物が存在しないと起こり得ない。以上を踏まえて自

然現象における「晴れる」と精神現象における「晴れる」の性質を実際の用例[5]を基に考察する。また、精神現象においては感情領域、思考領域、それぞれの領域でどのような条件を持つものが遮蔽物として存在するのかその性質についても考察していく。

3. 1. 自然現象における「晴れる」

<<物理的空間に雲・霧が消えることは「晴れる」>>

(1)良く晴れて雲ひとつない天気でした。

(BCCWJ)

(2)出発時は深い霧の中。登頂までに晴れることを願い、まずは登山口へ向かい歩き始めました。

(BCCWJ)

(3)コハクチョウの親子は、朝もやが晴れるころ、弥彦山と国上山のわきを飛んで、新信濃川の河口に出た。

(BCCWJ)

(1)～(3)は自然現象における「晴れる」を表している。(1)「雲」、(2)「深い霧」、(3)「朝もや」がそれぞれ消えてなくなることを「晴れる」と捉えている。

これらは粒子状の水蒸気の遮蔽物であるという点で共通し、消えることで太陽の光が差し込むという性質を持つ。

<<物理的空間に雨・雪が止むことは「晴れる」>>

(4)特に暗い空の下で、激しい雨によるグラウンドの様子と、空が晴れて「やっと外で遊べるぞ」と思う作者の喜びの心情表現とが、対比的に描写されているのがいい。

(朝日新聞 2007/10/31)

(5)気象台によると、雪は２９日明け方まで降るが、その後は晴れる見込み。

(朝日新聞 2012/02/29)

(4)「雨」、(5)「雪」がそれぞれ止むことが「晴れる」と捉えられている。そして、「雨」や「雪」をもたらす雲が消えることが「空が晴れる」ことである。

「雨」や「雪」は雲が存在しないと降らないことを我々は経験している。黒

い雲が気象現象をもたらし、気温を下げる、モノを濡らし台無しにするなど好ましくない状態を引き起こす。ここから雲の「雨」や「雪」など好ましくない状態をもたらす前兆であるという性質が指摘できる。

<<知覚者の視界において粒子状の遮蔽物が消えることは「晴れる」>>

(6)三日も同様の黄砂が観測されると予想しており、四日以降、徐々に視界が晴れていくという。

(中日新聞 2011/05/03)

(7)その数分後、舞い上がった土砂は、やがて自重で地面へ落ちていく。徐々に視界が晴れていく…。

(BCCWJ)

(8)板張りや甲板全面の下張りが、空中に吹き飛ばされるのをボライソーは目に収め、硝煙が晴れると、小型船が数隻、早くも大きく傾いていることに気づいた。

(BCCWJ)

(6)～(8)は、粒子状の遮蔽物が知覚者の視界から消えることを「晴れる」と捉えている。 知覚者の視界を妨げる雲・霧のように広がる砂や煙などが消えると視界が良くなることを我々は経験している。

実際には、(6)「黄砂」、(7)「土砂」、(8)「硝煙」の各々は気象現象ではないのだが、雲・霧のように粒子状の遮蔽物であり、消えることで視界において太陽の光が差し込む。このような視覚での経験が基盤となって「晴れる」と捉えられている。

3. 2. 精神現象における「晴れる」

①感情領域における「晴れる」
<<知覚者の精神空間において感情の遮蔽物が消えることは「晴れる」>>

(9)でも、心が晴れる日はなかった。仕事で周囲からほめられても、「病気のことを知っても、同じように評価してくれるだろうか」と思って苦しくなった。

(朝日新聞 2011/12/03)

(10)水田に映る岩手山の姿は藤沢さんにとっても原風景だ。かがんで草取り

をしていて、顔を上げると目に入る。そんな時すっと胸が晴れる。

(読売新聞 2010/05/05)

(9)「心が晴れる」では心が空間として概念化され、感情が遮蔽物として存在している状態である。また、(10)「胸が晴れる」も感情が胸との隣接性に基づくメトニミーとして胸も心と同様に感情が宿る場所として捉えられている。瀬戸(1995)にあるように光の量の少ない状態は何も見えることができずはっきりとしない不安を生み出す。どちらの用例も、不安や心配などの好ましくない感情が遮蔽物として存在する。それらが消え、安心感や爽快感が光として差し込むことが「晴れる」と捉えられている。

(11)月一回、東京の病院に通うため東武線を利用するので、時々は特急に乗って小さな旅気分。また、途中下車して散策するのも楽しい。心のもやもやが晴れます。

(東京新聞 2011/01/26)

(12)谷家の話は新鮮だった。「その舞台で、私もやりたいことを生かしたい」とメールを送った。胸のもやもやが、さっと晴れた。

(朝日新聞 2011/08/21)

(11)「心のもやもやが晴れる」、(12)「胸のもやもやが晴れる」では感情が「もやもや」という霧に近いイメージで捉えられている。ここからも、心、胸が気象現象の起こる空として概念化されていることが指摘できる。

これらの感情は雲・霧に包まれたようなどこか正体がつかめず、はっきりとしないことへの不満に結び付きやすい性質を持つ。そして、雲・霧の中にいる限り、その身体経験が続くように感情も消えない限り持続性を持つ。それが消えることで安心感や爽快感が光として差し込む。

(13)昨年４月から今年１月末までに、センターを利用したのは３４人、うち１２人が発達障害者だった。参加した女性はコミュニケーションがうまく取れず、仕事が長続きしなかったという。「同じ悩みを抱えている人がいて、自分だけじゃないと知って安心しました。なぜうまくいかなかったのか分かるようになって、雲が晴れる思いです」と打ち明ける。

(読売新聞 2012/02/27)

(14)そんなセコくて卑劣で悲しい行為に精を出しても、気持ちが晴れるどころか、なおさら複雑でタチの悪いストレスに包まれるだけでしょう。

(朝日新聞 2011/08/20)

さらに、(13)では障害から生じる「コミュニケーションがうまく取れず、仕事が長続きしない」という正体がつかめない悩みに関する感情を雲のように捉え、消えることを「晴れる」と捉えている。そして、(14)でも雲・霧のように包み込むはっきりとしない「ストレス」が消えることを「晴れる」と捉えている。これら「悩み」も「ストレス」も何かはっきりとしないことから生まれ、「{悩み/ストレス}が積もる」が成り立つように持続性を持っている。ここでも、感情が消えることで安心感や爽快感が光として差し込む。

(15)何より、兄の無念が晴れない。今もどこかに犯人が生きていると思うと許せない。

(中日新聞 2009/12/02)

(16)応募４年目にして２位に入賞。豪華なお皿のセットを副賞にもらい、積年の恨みが晴れた思いだった。

(朝日新聞 2009/01/03)

(17)けれど、官僚をたたいてもせいぜい憂さが晴れるだけだ。

(朝日新聞 2012/05/17)

(18)避難所生活が３カ月近いという男性（６６）はビールを片手に「うっぷんが晴れ、最高の気分。もう少し早く来てもらいたかった」と喜んだ。

(朝日新聞 2011/06/06)

(15)「無念」、(16)「恨み」、(17)「憂さ」、(18)「うっぷん」なども感情が「晴れる」と捉えられている用例である。これらも心が空間として概念化され、心の空に雲・霧のように捉えられる感情が存在する状態である。共通する特徴ははっきりしない好ましくない感情であり、持続性を持ったものである。これは、「{無念/恨み/憂さ/うっぷん}が積もる」が容認できるように持続性を持って存在し続けることからも指摘できる。

つまり、これらに共通する感情ははっきりとしないことから生じる好ましくない感情であり、持続的に残るものである。また、解消されることが好ましいと考えられる感情でもある。雲・霧はその中にいる限り、光を遮り、その身体経験は持続することを基盤とする。こういった感情が消えると好ましい感情として安心感や爽快感が光として差し込む。

ゆえに、元々存在すること自体が好ましい感情である「＊喜びが晴れる」、「＊愛しさが晴れる」、「＊幸福が晴れる」では感情で遮られているわけではなく「晴

れる」の好ましくない状態を前提とする性質により容認度が下がる。

一方、「＊怒りが晴れる」、「＊恐怖が晴れる」、「＊恥ずかしさが晴れる」ではそれぞれ好ましくない感情であるが、大抵の場合、身体の心拍数や体温が変化したり、鳥肌が立ったり、顔が赤くなったり、身体的な反応を伴う。また、何か感情を想起させるものであることを認識しなければ感情は起こらない。例えば、「得体のしれない恐怖」といった表現も、自分に何か害が及ぶことは認識しているので「恐怖」と言えるのであって、その点でははっきりしていると言える。以上から起点領域の経験が目標領域の感情の性質において不必要な要素となっていることが指摘でき、メタファー的意味の実現を阻害している。

(19)途中登板で不安げな穂満侑汰君（２年）の顔が晴れた。投手を気持ちよく投げさせる。それも捕手の役目だと思っている。

(朝日新聞 2011/07/17)

(20)おさらいテストや模擬テストなど絶不調だ。リョウマも今回のテストでかなり落ち込んでいる。冷静に話し合って解決策を出しているうちに表情が晴れた。

(朝日新聞 2010/09/18)

(19)「顔が晴れる」、(20)「表情が晴れた」は知覚者の顔に現れた感情が消える用例である。これらはメトニミーであって、「晴れた{顔/表情}」というものは具体的には存在しない。そして、いきなり「晴れた{顔/表情}」になることはなく好ましくない感情が存在することを前提とする。

知覚者の精神状態が好ましいか、好ましくないかに影響され、感情が顔との隣接性に基づく「顔」を介したメトニミーとして表れている。また、「明るい表情」、「暗い表情」という表現が成り立つように、光の量との関係が指摘できる。よって、(19)、(20)も不安や心配といった感情が遮蔽物として結び付きやすい。

②思考領域における「晴れる」

<<知覚者の精神空間において思考の遮蔽物が消えることは晴れる>>

(21)これから公判を迎える小沢氏に対しては「裁判は時間と、精神的にも大きな負担がかかるので、体に気をつけて頑張ってほしい。必ず疑いが晴れる日が来ると思うので、政治の第一線で頑張ってほしい」と語った。

(朝日新聞 2011/09/27)

(22)「息子は救急措置をされずに放置されていたのではないか、との疑念が

晴れました」事件で大学生の一人息子を失った五十代の男性は、東京消防庁の担当者から検証結果を説明され、納得した表情で話した。

(東京新聞 2008/11/29)

(23)風間氏が菅家さんに家族会のことを伝えると、「真犯人を絶対に捕まえてほしい」と繰り返したという。「真犯人が捕まって初めて嫌疑が晴れると考えているのだろう。その再捜査をさせるのが私たちの仕事」と力を込めた。

(朝日新聞 2011/06/30)

(21)～(23)は知覚者の精神空間における思考の遮蔽物を雲・霧と捉える用例である。これらは①で挙げた感情領域と異なる面で雲・霧の性質に焦点が当たる。瀬戸(1995)にもあるように、光の量が少ないことは正しく「区別がつくこと」ことができず、「分かる」こともできず、はっきりしない。

また、「雨」でも「晴れ」でもない雲・霧の状態は、黒でも白でもない、はっきりとしない中間の灰色に概念化が起こる。例えば、「グレーゾーン」などといった表現と同様に「灰色」は白黒判断できない際に用いられる。以上を基盤に知覚者には(21)「疑い」、(22)「疑念」、(23)「嫌疑」といった疑いに関する思考と結び付く。

これらが知覚者の精神空間の空に雲・霧となって立ち込める。思考のこういった遮蔽物が消えると、「分かる」ことができて安心感や爽快感が光として差し込む。以上の基盤によって精神では「晴れる」と捉えられることになるのだ。

4．まとめ

気象現象における「晴れる」とは、遮蔽物（雲・霧）の量が少ない光の量が多い状態であり、雲・霧が消えると太陽の光が出るという性質を持つ。

そして、気象現象を起点領域、精神を目標領域とするメタファーにおいて、起点領域「晴れる」には光・視覚・空間に関する経験が存在し、遮蔽物が存在する。これらを基盤にメタファーとして意味が実現され、精神においても①感情領域、②思考領域、それぞれ雲・霧が持つ性質に焦点が当たり、写像される。この性質を持った遮蔽物が消えることで精神においても安心感や爽快感が光と捉えられ差し込む。目標領域の精神において起点領域が持つ制約により「晴れる」のメタファー的意味が実現されるものは以下のような性質を持つ。

①感情領域において光が少ないことが身体に及ぼす不安・心配に関する感情

②感情領域において雲・霧が身体に及ぼす「正体がつかめない」、「はっきりしない」、「持続性のある」などの性質を持つ好ましくない感情
③思考領域において雲・霧が身体に及ぼす「はっきりしない」、雲・霧の概念化から生じる「白黒判断できない」などの性質を持つ疑いに関する思考

本稿は「晴れる」だけを取り上げた一考察である。よって、本稿の記述では指摘し切れていない気象現象のメタファーとしての特徴はまだ存在するだろう。今後は他の気象現象を表す語彙との関係性から綿密な分析をしていきたい。また、それぞれの気象現象との関係からその概念体系を再検討したい。

注

1　本稿ではメタファー表現を谷口(2003)に従い、以下のように定義する。
　メタファー表現：概念レベルのメタファーを言語的に具体化したもの。
2　「せいしん（精神）」の意味・用法は大きく4つに分けて記述されている。この意味・用法は第一番目に記述されている。
3　本稿では籾山(2010)に従い、以下のように定義する。
　メトニミー : 2つの事物の外界における「隣接性」、さらに広く2つの事物・概念の思考内・概念上の「関連性」に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。
4　英文の概訳は全て稿者に拠る。
5　用例出典の傍線は断りのないもの以外全て稿者に拠る。例文番号は、全体を通しての通し番号を用いる。実線は分析対象語、点線は分析対象語以外の注目すべき箇所を示す。

参考文献

有薗智美(2007)「「頭」「胸」「腹」—精神活動の在り処としての身体部位詞」『日本認知言語学会論文集』7, 310-320.
有薗智美(2008)「「顔」の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』9, 287-301, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻.
鷲見幸美(2010)「日本語の歌詞に見る「心」の概念化」『戯れのテクノロジー』73-80, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.

瀬戸賢一(1995)『メタファー思考』講談社.
谷口一美(2003)『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』(英語学モノグラフシリーズ20)研究社.
多門靖容(2006)『比喩表現論』風間書房.
鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』くろしお出版.
入学直哉(2002)「太陽光の意味拡張における認知メカニズム」上野義和 編『認知意味論の諸相―身体性と空間の認識』松柏社, 49-98.
松本曜(2007)「語におけるメタファー的意味の実現とその制約」山梨正明他 編『認知言語学論考』6, 49-93.
宮崎公江(2005)「日英語における光と光の欠如」『南山短期大学紀要』33, 149-169.
籾山洋介(2006)『日本語は人間をどう見ているか』研究社.
籾山洋介(2010)『認知言語学入門』研究社.
森田良行(1984)『基礎日本語3 意味と使い方』角川書店.
Deignan, Alice(1997)*Collins Cobuild English Guides 7: Metaphor.* London :London Harper Collins.
Grady,J.(1997)*Foundations of Meaning: Primary metaphors and primary scenes.* Ph. D. dissertation,University of California, Berkeley.
Shinohara,Kazuko and Matsunaka, Yoshihiro(2003)“An analysis of Japanese emotion metaphors.” 『ことばと人間』4,1-18. 横浜「言語と人間」研究会.
Shinohara,Kazuko and Matsunaka, Yoshihiro(2009)“Pictorial metaphors of emotion in Japanese comics.” *Multimodal Metaphor.*Berlin : M. de Gruyter.265-293.
Kövecses, Zoltán(2000)*Metaphor and emotion : language, culture, and body in human feeling.* Cambridge ; New York : Cambridge University Press.
Kövecses, Zoltán(2010)*Metaphor : A Practical Introduction(2nd ed).* Oxford: Oxford University Press.(初版2002)
Lakoff ,George and Johnson, Mark(1980)*Metaphors We Live By.* Chicago:University of Chicago Press.(渡部昇一,楠瀬淳三,下谷和幸 訳(1986)『レトリックと人生』大修館書店)
Lakoff, George(1987)*Women, Fire, and Dangerous Things.*Chicago : University of Chicago Press.(池上嘉彦,河上誓作(他) 訳(1993)『認知意味論』紀伊國屋書店)
Lakoff, George(1993) “The contemporary theory of metaphor.” *Metaphor and Thought*, ed. by Ortony, A. Cambridge: Cambridge University Press.
Lakoff ,George and Johnson, Mark(1999)*The Philosophy in the Flesh.* Basic Books.
(計見一雄 訳(2004)『肉中の哲学―肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』哲学書房)

使用辞書

松村明 編(2006)『大辞林』第三版,三省堂.

用例出典

聞蔵IIビジュアル(朝日新聞社)
KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)
中日新聞・東京新聞記事データベースサービス
読売新聞「ヨミダス歴史館」